

教育実習指導による指導教員の成長に関する研究

—幼稚園教育実習における指導教員の成長に関する研究—

池田 明子 掛 志穂 君岡 智央 中山 芙充子
広兼 睦 森脇 有紀 升岡 智子 井上 弥
朝倉 淳 児玉真樹子

1. 研究の目的と背景

本研究は、教育実習が実習生だけでなく指導教員の成長を促すものであることに着目し、幼稚園教育実習を通して実習生と指導教員が相乗的に高まる状況を確認するとともに、そのメカニズムを考察することを目的とする。

教育実習が教員養成の要であることは言うまでもない。実習生は、教育実習によって大きく成長する。教育実習と実習生の成長との関係については多くの研究が存在する。一方、教育実習は、現場で実習生の指導にあたる教員にとっても、自らの教育観や子ども観、指導法など、自分自身を見つめなおす機会となる。多くの指導教員は、教育実習を通して、実習生の成長とともに自己の変容を感じているであろう。教育実習において実習生と指導教員が相乗的に向上することを明らかにすることで、より充実した教育実習の実施が期待できると考え、今回の研究にいたった¹⁾。

2. 研究の方法

実習生に対しては、実習開始時・中間時・終了時の3回にわたって、アンケートを実施し、実習生の変容を見ることにした。アンケートは、子ども観・保育観・効力感・職業的同一性の4観点からなる39項目で構成されている。また、実習終了時には、実習開始の頃と比べて自身がかわったと思うことについての自由記述欄を設けた。

指導教員に対しては、保育終了後の実習生とのカンファレンスに関する記録を実施した。記録の内容は「カンファレンスの議題内容」「カンファレンスを通して実習生が学んだこと」「カンファレンスを通して教員自身が学んだこと」「カンファレンス後、教員同士で打ち合わせたこと」の4つの内容である。

3. 結果と考察

(1) クラスタ分析による結果

2回目の調査時には欠席者がいたため以下の分析からは除外した。1回目および3回目の子ども観、保育観、効力感、職業的同一性得点を基に、実習生相互のユークリッド距離の自乗を求め、ワード法によるクラスタ分析を行った。デンドログラムの形状などを考慮して、図1に示したような5クラスタ解を採用した。

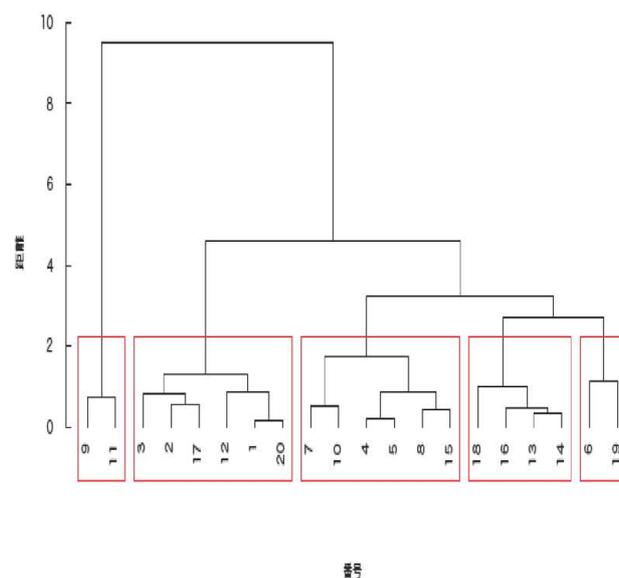


図1 クラスタ分析のデンドログラム

第1クラスタは、3、2、17、12、1、20番の6人から成るクラスタであり、第2クラスタは、7、10、4、5、8、15番の6人から成るクラスタであった。第3クラスタは、6、19番の2人、第4クラスタは9、11番の2人から成るクラスタであり、第5クラスタは、18、16、13、14番の4人から成るク

Akiko Ikeda, Shiho Kake, Tomochika Kimioka, Humiko Nakayama, Muthumi Hirokane, Yuki Moriwaki, Tomoko Masuoka, Wataru Inoue, Atushi Asakura, and Makiko Kodama: The growth of an adviser through practice teaching guidance in kindergarden

ラスターであった。

これらのクラスターごとの1回目と3回目の子ども観、保育観、効力感、職業的同一性平均得点を示したものが図2である。クラスターの人数が少なく、分散分析を適用することはできないが、この図2をみるとわかるように、子ども観、保育観と1回目の効力感得点には、あまり大きな違いは見られないようである。しかし、3回目の効力感得点が上昇している第2、5クラスターに比べると、他の第1、3、4クラスターではむしろ低下しているようである。職業的同一性得点がもともと高くかつ上昇している第3、5クラスターに比べ、もともと低い上に低下している第4クラスター、はじめは中間的で上昇した第2クラスターに対して低下した第1クラスターという特徴がみられる。第3クラスターと第5クラスターの違いは、第5クラスターでは効力感が上昇しているのに対して第3クラスターでは低下している点にある。

以上のことから、第1クラスターは、効力感が低下し中間的職業的同一性も低下したグループ、第2クラスターは、効力感が上昇し中間的職業的同一性も上昇したグループ、第3クラスターは、効力感が高い職業的同一性が上昇したグループ、第4クラスターは、効力感が低下し、低い職業的同一性がさらに低下したグループ、第5クラスターは、効力感が上昇し、高い職業的同一性が上昇したグループと考えられる。

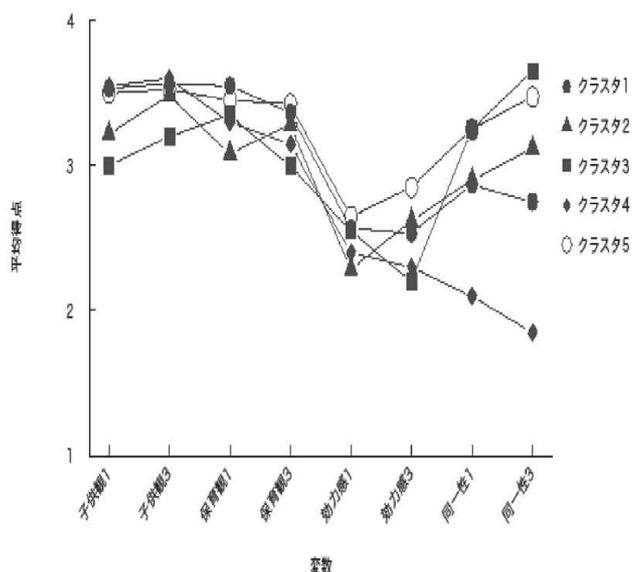


図2 クラスターのプロフィール

次に、各クラスターの指導教員による子ども理解の評定平均値を比較してみた。第1クラスターでは3.8、第2クラスターでは4.5、第3クラスターでは4.5、第4クラスターでは4.0、第5クラスターでは4.5、となっ

ており、効力感が低下し中間的職業的同一性も低下した第1クラスターと、効力感が低下し、低い職業的同一性がさらに低下した第4クラスターの2つのクラスターでやや低くなっているようである。

同じ2人グループではあるが、効力感が高い職業的同一性が上昇した第3クラスターと効力感が低下し、低い職業的同一性がさらに低下した第4クラスターの第3回目の調査時の自由記述を比較してみた。

分析にはR (R Core Team, 2013)を用いた。文章単位に分割し、京都大学情報学研究科と日本電信電話株式会社コミュニケーション科学基礎研究所の共同研究ユニットプロジェクトによるMeCabを用いて、それぞれの文章の名詞・動詞・形容詞・接続詞について、原型に変形した後、頻度1以上の形態素についてクラスターごとにbigramの共生起行列を求め、igraphを用いたネットワーク分析により関係を図示したものが、それぞれ図3と図4である。

どちらのクラスターも2人分の記述のためかなり少ない形態素しか見られない。第3クラスターでは、「幼児」「する」「思う」を中心とする比較的複雑な連鎖と「子ども」「実習」のまとまり、「意欲」「教師」「将来」のまとまり、「思い込み」「かわる」のまとまりといった複数のまとまりがみられる。これに対して、低い職業的同一性がさらに低下した第4クラスターの方が、「様々な」「子ども」を中心とする単純な連鎖と「自信」「なくす」の連鎖のように単純な構造になっており、また「自信」「なくす」や「難しい」「思う」のような否定的な形態素の連鎖が見られる。

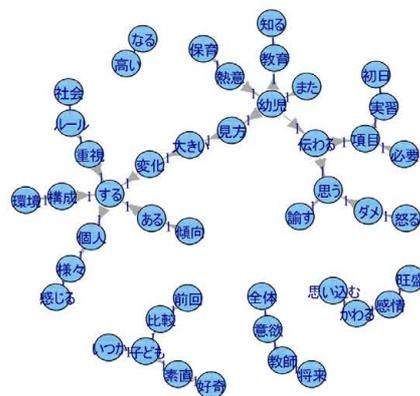


図3 第3クラスターのbigramによるネットワーク分析

表1 クラスターの特徴と指導教員との関連

クラスター		熟達	新任
第1	効力感が低下し中間的職業的同一性も低下	A (3), C (1), E (2)	
第2	効力感が上昇し中間的職業的同一性も上昇	A (1), C (1)	B (3), D (1)
第3	効力感が低下しているが高い職業的同一性が上昇	E (1)	B (1)
第4	効力感が低下し、低い職業的同一性がさらに低下	C (2)	
第5	効力感が上昇し、高い職業的同一性が上昇	E (1)	D (3)

() 内は実習生数

5つのクラスターを、効力感と職業的同一性得点の上昇・下降の組み合わせから再整理すると、表2のような3つのグループに分けられる。まず、両者とも下降するグループは、熟達教員に配属された学生であり、両者とも上昇するグループは、新任教員に配属された学生が多い(10名中7名)

表2 類似クラスターの特徴と指導教員との関連

クラスター		熟達	新任
第1, 4	効力感が低下、職業的同一性が低下	A (3), C (3), E (2)	
第2, 5	効力感が上昇、職業的同一性が上昇	A (1), C (1), E (1)	B (3), D (4)
第3	効力感が低下、職業的同一性が上昇	E (1)	B (1)

また、図3から図7に表れている第1クラスターから第5クラスターのbigramによるネットワーク分析の結果をまとめたものが表3である。

表3 クラスターごとのネットワーク分析

クラスター	ネットワーク分析
第1	<ul style="list-style-type: none"> 「子ども」を中心とした複雑な連鎖が見られる。 「子ども」とはつながらない教師のあるべき姿に関するいくつかのグループが見られる

第2	<ul style="list-style-type: none"> 「子ども」を中心とした複雑なグループを形成しており、ほとんどが「子ども」に関連する記述になっている。 肯定的な感想と思われる形態素のグループが見られる。
第3	<ul style="list-style-type: none"> 「幼児」「する」「思う」を中心とする比較的複雑な連鎖が見られる。 「こども」「実習」のまとまり、「意欲」「教師」「将来」のまとまり、「思い込み」「かわる」のまとまりといった複数のまとまりが見られる。
第4	<ul style="list-style-type: none"> 「様々な」「子ども」を中心とする単純な連鎖が見られる。 否定的な感想と思われる形態素の連鎖が見られる。
第5	<ul style="list-style-type: none"> 「子ども」を中心とした複雑な連鎖と「声」「かけ」「深まる」「思う」など単純な連鎖など、複数のまとまりがみられる。 「子ども」を中心とした連鎖が、より複雑な構造になっている。

5つのクラスターを、効力感と職業的同一性得点の上昇・下降の組み合わせから再整理すると、表4のような3つのグループに分けられる。まず、両者とも下降するグループは、「子ども」を中心とした複雑あるいは単純な連鎖が見られるが、それに加えて教師のあるべき姿や自身に対する否定的な感想が見られる。両者とも上昇するグループは、「子ども」を中心とした複雑な連鎖が見られ、また肯定的な感想が見られる。

表4 類似クラスターの特徴とネットワーク分析との関連

クラスター		ネットワーク分析
第1, 4	効力感が低下、職業的同一性が低下	<ul style="list-style-type: none"> 「子ども」を中心とした複雑あるいは単純な連鎖が見られる。 教師のあるべき姿に関するグループが見られる。 否定的な感想と思われる形態素のグループが見られる。
第2, 5	効力感が上昇、職業的同一性が上昇	<ul style="list-style-type: none"> 「子ども」を中心とした複雑な連鎖が見られる。 肯定的な感想と思われる形態素のグループが見られる。

第3	効力感が低下，職業的同一性が上昇	<ul style="list-style-type: none"> ・「幼児」「する」「思う」を中心とする比較的複雑な連鎖が見られる。 ・「こども」「実習」のまとまり，「意欲」「教師」「将来」のまとまり，「思い込み」「かわる」のまとまりといった複数のまとまりが見られる。
----	------------------	--

(2) 指導教員による実習生とのカンファレンスの記録の結果

教育実習期間中は，保育終了後，指導教員と実習生とで，保育に関するカンファレンスを行っている。カンファレンス終了後の指導教員による記録の結果，指導教員自身が学んだことについて次のような特徴が見られた。

① 熟達教員

<カンファレンス1>

友だちに手が出ていた子どもに実習生がかかわろうとすると，怒って心を閉ざしてしまう子どもにどのようにかかわったらよかったのだろうかというカンファレンスを通して。“けんかをしている時こそ，冷静に落ち着いてかかわることが大事だと思う。なぜやってしまったのか，やらざるを得なかったのかを受け止めることが大事。正直に本当のことを話せるようになるのは特に大事だと思う”と指導教員は保育で大切にしたいことについてふりかえっている。

<カンファレンス2>

子どもと子どもをつなぐかかわりとはというカンファレンスを通して。“自分一人では見えていなかった子ども同士のかかわりを知ることができた。友だちとのかかわりが広がっている姿。一方でうまくかかわっていない姿など。もっと気をつけて見ていく必要がある”というように，指導教員は自身が見えていなかったことに多様な目で見ることによって気づいたことにふれている。

<カンファレンス3>

子ども同士のトラブルの際に，素直になれず事実をごまかしてしまう子どもにどうかかわったらよいのかというカンファレンスを通して。“トラブルの解決はパターン化することはできず，一人ひとりに応じたかかわりの大切さを再認識するとともに，実習生が子どもの心をほぐすことができるようにしっかり向き合おうとする思いを感じている”。つまり，指導教員は実習生のよさを受け止めようとしている。

② 新任教員

<カンファレンス4>

カンファレンスの議題についてというよりは，カンファレンスの進め方自体を模索している。“子どもの姿をよみとったり子どもの気持ちに寄り添ったりすることが大切！という話をしたら次の日のカンファレンスでは子どもの姿についての話しか出てこない。カンファレンスのやり方を工夫しなければ” “たくさん話をしている気がするけれど想像していたよりは相手（実習生）に伝わっていない。ただこなすだけではダメ！” この後，指導教員は自身の実習生としての体験と絡めながら“実習をただこなすだけという思いでは違う”という内容を実習生に伝えている。

<カンファレンス5>

カンファレンスの議題についてというよりは，カンファレンスを通して自分自身をふりかえったり，カンファレンスの進め方についてふりかえったりしている。“反省を聞いたり今日の保育者の姿を見たりした中で，やはり「楽しむ」はとても大事だと思った。保育者がどこに立ってどんな表情で，どんな仕事で存在しているかということは，子どもにとって大きな影響があるのだと思う” “学年合同でカンファレンスをする中で，その進め方や投げかけ方について勉強になった。反省を言ってそこからまた深め合うことができるように，どう投げかけてどういう順番で投げかけていくかが大切だと思った。また「今日のこと」だけでなく，「今日+今後につながる」指導をしていくことが大切だと思った”と振り返ることを積み重ねている。

③ 考察

熟達教員は，実習生のよさを受け止めたり，実習生と共に学ぶことの意義を感じたりしている部分もあるが，むしろ保育として大切なことを再認識していることについての記述が多く見られた。熟達教員は保育として大切なことを経験として多く得ているだけに，実習生からの問いがあった際に，自分の中にある知識や保育観などを伝えながら，その大切さを再認識していることが多いととらえられる。

一方，新任教員はカンファレンスでの実習生の反応から自身のカンファレンスの進め方を模索したり，実習生のよさから学んだりするなど，実習生との呼応関係に関する記述が多く見られた。新任教員は経験が浅いだけに，指導教員としての使命感や責任感に伴い，実習生の状況をより詳しく把握しようとする姿勢がう

かがえる。また、自身が教育実習生として教育実習を経験したことが近い過去にあっただけに、より実習生の立ち位置に近い場所で実習生の姿をとらえようとしたともとらえられる。

(3) 総合考察

実習生のアンケートから導き出したクラスター分析や、指導教員によるカンファレンスの記録より、次のことが分かった。

- ・クラスター分析によると、実習生の効力感・職業的同一性が実習期間中に上昇したグループは、新任教員に配属された学生が多く、逆に下降したグループは、熟達教員に配属された学生が多い。
- ・クラスターごとのネットワーク分析によると、実習生の効力感・職業的同一性が教育実習期間中に上昇したグループは、「子ども」に関する複雑な連鎖の記述や肯定的な感想が見られた。逆に下降したグループは、「子ども」に関する連鎖の記述もあるが教師のあるべき姿や自身に対する否定的な感想の記述が見られた。
- ・指導教員による実習生とのカンファレンスの記録によると、新任教員は実習生との呼応関係をより意識していることが分かった。一方、熟達教員は保育として大切なことを再認識していることが多い。

以上のことから、次の3点が考察として述べられる。

1点目は、新任教員の成長に関してである。新任教員に配属された実習生は効力感・職業的同一性が上昇した。新任教員の場合、実習生が目指すモデルとして身近であるため、特に実習指導上の技能や配慮が多くなくても、効力感や職業的同一性の上昇につながったと考えられる。また、新任教員自身が実習生との呼応関係を非常に意識していることが実習生にも伝わり、相乗的な向上につながったと考えられる。今後は、実習生との呼応関係を積み上げながら保育として大切なことをカンファレンスの中で深めていけるようにする

ことが望まれる。

2点目は、熟達教員の成長に関してである。熟達教員に配属された学生は、逆に下降するケースが見られた。これは、熟達教員と実習生では、力量の差が大きく、実習生は効力感も職業的同一性も低下せざるを得なかったとも考えられる。「自分が保育をするとクラスがなかなかまとまらないけれど、先生が保育をされるとずっとクラスがまとまる」という実習生の声からもそのことがうかがえる。しかし、教育実習の性質を考えれば、このような力量の差を克服する指導が望まれるところである。つまり自身の保育経験から語ると同時に、実習生との呼応関係を意識し、個々の実習生の状況を理解し、個々に応じた指導のあり方を模索することが望まれる。

3点目は今後の展望についてである。今回実施したクラスターごとのネットワーク分析の結果を生かすことが期待される。つまり、今回は「子ども」に関する記述が複雑であるほど、効力感・職業的同一性が上昇するという関連が見えた。したがって、カンファレンスの際に「子ども」をどのようにとらえて、どのようにかかわるとよいのかということなどを共に語り合いながら具体的に深めていくことが、実習生と指導教員が相乗的に向上していける教育実習を構築することにつながるととらえられる。

引用(参考)文献

- 1) 深見俊崇・木原俊行「他者との関わりによる教育実習生の実践イメージの変容」、『日本教育工学会論文誌』28(1), 2004, pp.69-78.
- 2) 佐藤智恵「保育者養成校で学ぶ学生のもつ保育観に関する研究—取得資格による比較より—」『幼年教育研究年報』第33巻, 2011, pp.31-39.
- 3) 高橋衣「小児看護学実習における幼稚園・保育園実習の有効性の検討—幼稚園・保育園実習前後の子ども観の比較から—」『足利短期大学研究紀要』27巻, 2007, pp.59-66.